

第4節 中世の調査成果

1 概要(第37図)

この時期の遺構は、掘立柱建物跡2基、柵列1基、溝1基、ピット群1箇所である。総柱掘立柱建物跡SB7は、比較的大型のものと推定できる。重複するように掘立柱建物跡SB8も検出した。いずれも圃場整備に伴う掘削のため遺存状態は極めて悪い。掘立柱建物跡の周囲にはピット群1が見られるが、建物建築に際しての足場穴等の性格が考えられる。やや離れて西側調査区際には、柵列SA2がある。これも圃場整備に伴う掘削のため遺存状態は悪い。この時期の建物敷地の西側を区画するものと考えられる。調査区東側では、南北方向に延びる溝SD4を検出した。この時期の建物敷地の東辺を区画する溝の可能性はある。

遺構に伴う遺物はほとんど検出できなかったが、遺物包含層や表土及び造成土中から、瓦質土器をはじめ中世陶磁器類が出土していることから、15世紀ごろの有力者層の居宅を含む集落の一部であったと考える。

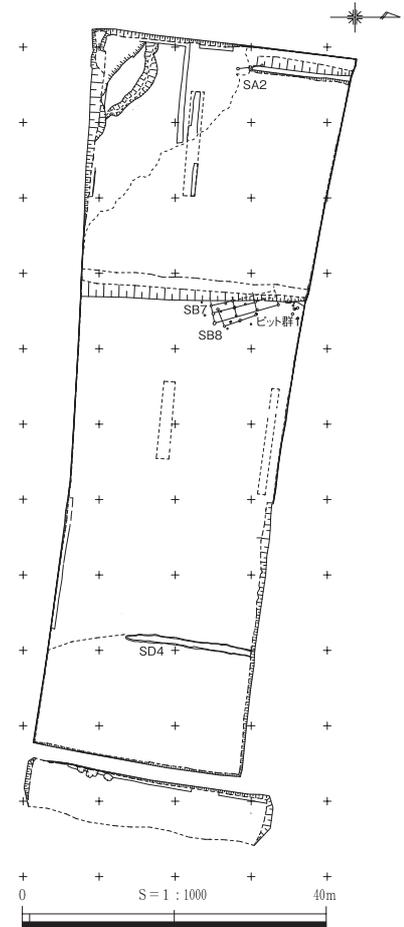
2 掘立柱建物跡

SB7(第38図、表9、PL.15)

調査区のやや北西側のB10・C10グリッドにあり、標高69.4m付近の平坦面に位置する。造成土除去後の礫層(F層)上面で検出した。ピット群1の中にあり、SB8と重複する。遺構の西側は圃場整備の際の掘削により大きく削り取られており、遺存状態は悪い。

桁行3間(8.8m)、梁行2間(2.3m)以上を測る総柱の掘立柱建物跡と推定される。主軸方向はN-15°-Wとやや北西方向を向く。平面積は19.8㎡以上と大型に復元できる。

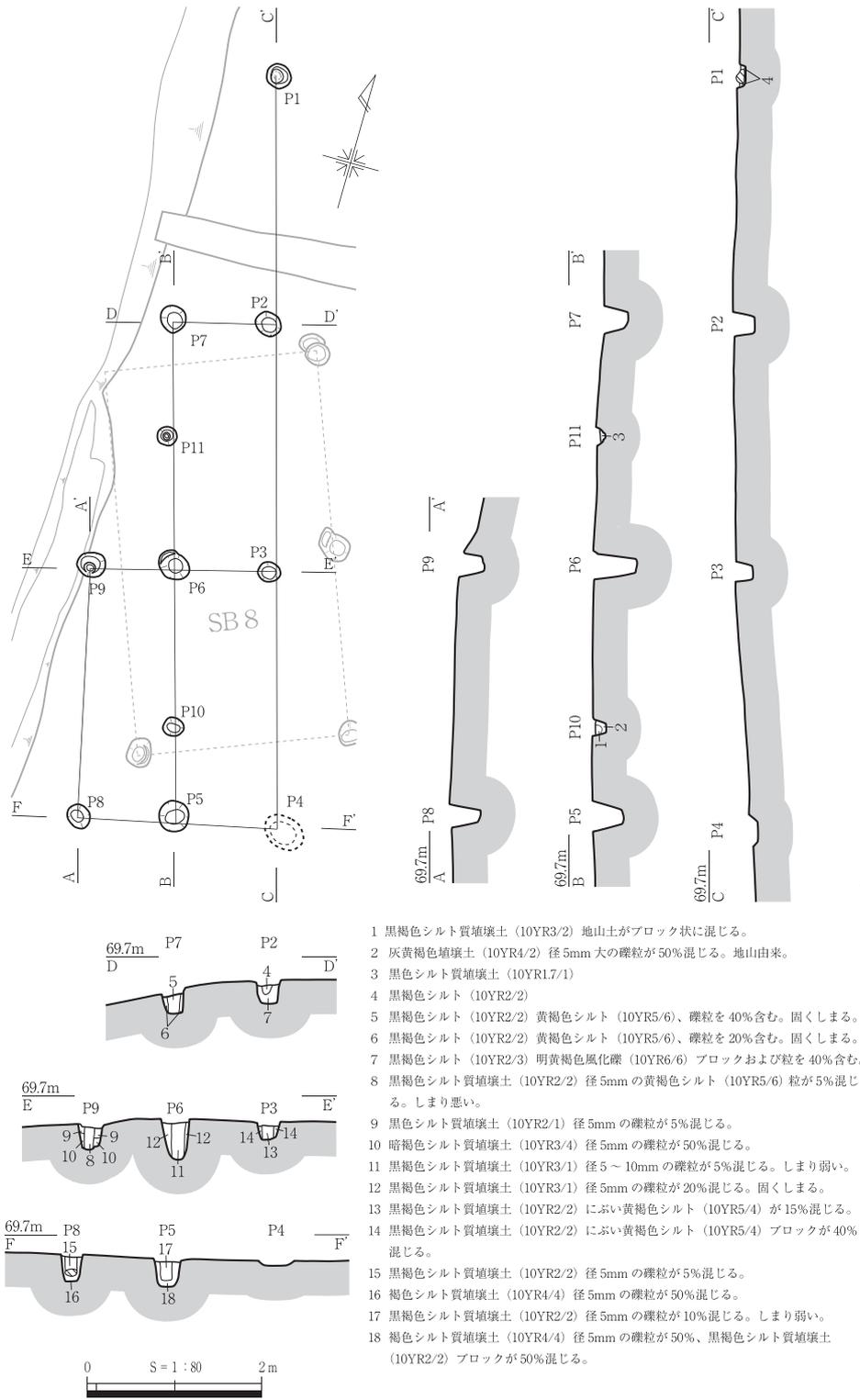
柱穴の規模は径21~50cm、深さ11~49cmを測る。P1~P4の桁筋は、やや乱れはあるもののほぼ直線状に並び、柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.9m、2.9m、3.0mである。P5~P7の柱穴間距離はP5-P6間から順に2.9m、2.9mである。P8-P9間も2.9mである。梁筋となるP4・P5・P8は、やや乱れがあるもののほぼ直線状に並び、柱穴間距離はP4-P5間1.2m、P5-P8間1.1mと桁側に比べて半分以下である。P5-P6間、P6-P7間には、床束と考えられるP10・P11が



第37図 中世遺構配置図

表9 SB7柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	28×25-12	柱痕跡径16cm
P 2	30×26-26	柱痕跡径13cm
P 3	26×22-21	柱痕跡径13cm
P 4	50×36-10	
P 5	35×34-35	柱痕跡径14cm
P 6	38×30-49	柱痕跡径17cm
P 7	31×29-27	柱痕跡径15cm
P 8	30×25-34	柱痕跡径16cm
P 9	33×29-30	柱痕跡径13cm
P 10	28×21-17	
P 11	28×28-11	



第38図 SB7

前後関係は不明である。

SB 8 (第39図、表10、PL.15)

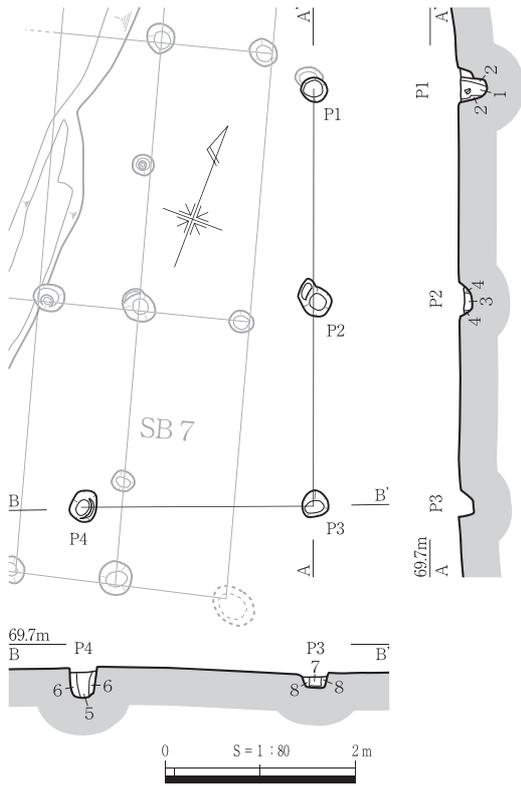
調査区やや北西側のB10・C10グリッドにあり、標高69.4m付近の平坦面に位置する。造成土除去後の礫層(F層)上面で検出した。ピット群1の中にあり、SB7と重複する。遺構の西側は圍場整

あり、他の柱穴に比べて規模が小さい。柱穴のうちP1・P3・P4・P10・P11を除いて、柱穴底面の標高は69.1m前後と深くなることから、これらは通し柱である可能性がある。また、P1の底面には地山由来の角礫が置かれており、礎板石であった可能性があることから、P1についても通し柱であった可能性がある。

柱穴埋土は、各ピット黒褐色土を主体とする1～3層程度に分層できた。P2・3・5～9で柱痕跡が検出され、復元される柱径は13～17cmである。

P7・P10埋土中で遺物が出土しているが、図化できなかった。

時期を判断する遺物が出土していないが、古代の掘立柱建物跡とは主軸方向がずれ、構造も異なること、近辺の造成土中から中世の遺物が出土していることから、当遺構も中世ごろのものと考え



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 径1～10mmの黄褐色風化礫 (10YR5/6) 粒が25%混じる。固くしまる。
- 2 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR5/3) 黄褐色風化礫 (10YR5/6) 粒が10%混じる。
- 3 黒色シルト質埴壤土 (10YR2/1) 径10mmの礫を10%含む。
- 4 にぶい橙色シルト (10YR6/4) 地山由来。黒色シルト質埴壤土 (10YR2/1) ブロックが50%混じる。
- 5 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/2) 3～5mm大の礫粒が10%混じる。
- 6 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/2) 5mm大の礫粒が3%混じる。
- 7 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/2) しまり弱い。
- 8 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR2/3) オリーブ褐色埴壤土 (2.5Y4/4) ブロック、径5mm大の礫が混じる。

第39図 SB8

3 柵列

SA2 (第40図、表11、PL.16)

調査区中央西端のB13・C13グリッドにあり、標高68.8m付近の南西に緩やかに傾斜する斜面部に位置する。造成土を除去した後の礫層(F層)上面で検出した。本来はさらに上層から掘り込まれたものと考えられるが、圃場整備による掘削のため遺存状態は悪い。

N-8°-Wとやや北西方向に延びる。計3基のピットからなり、長さ3.2m以上を測る。ピットは、径20～36cm、深さ21～45cmを測り、南のものほど底面の標高が低くなっている。柱穴間距離はP1-P2間から順に、1.5m、1.7mである。

埋土は、礫を含む黒色土である。

遺物は出土していないが、埋土の状況、中世と考えられるSB7とほぼ軸を揃えることから、ほぼ同時期のものと推察する。中世の敷地

備の際の掘削により大きく削り取られており、遺存状態は悪い。

桁行2間(4.4m)以上、梁行1間(2.4m)以上を測る掘立柱建物跡である。主軸方向はN-22°-Wとやや北西方向を向く。平面積は10.6㎡以上となり、中型に復元できると考える。

柱穴の規模は径26～40cm、深さ9～34cmを測る。P1～P3の桁筋は直線状に並び、柱穴間距離はP1-P2間、P2-P3間とも2.2mである。

埋土は黒褐色土を主体とし、2～3層に分層できた。いずれの柱穴も柱痕跡が確認でき、復元される柱径は13～17cmである。

P2埋土中で遺物が出土しているが、図化できなかった。

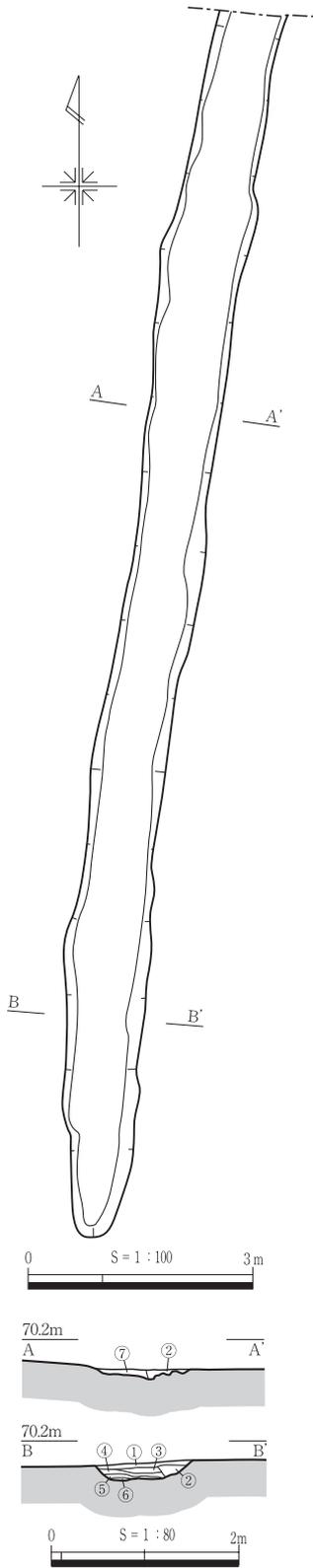
時期を判断する遺物が出土していないが、中世と考えられるSB7とほぼ主軸が揃うこと、近辺の造成土中から中世の遺物が出土していることから、当遺構も中世ごろのものと考えられる。SB7と重複するが、前後関係は不明である。

表10 SB8柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	27×26-29	柱痕跡径15cm
P 2	40×31-9	柱痕跡径17cm
P 3	28×27-16	柱痕跡径13cm
P 4	34×28-34	柱痕跡径14cm

表11 SA2柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	30×28-21	
P 2	36×30-45	
P 3	36×30-31	



- ① にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4)に黒褐色土が混じる。砂礫を多く含む。(攪乱土)
- ② 黒褐色土(10YR3/1) 砂礫をわずかに含む。(攪乱土)
- ③ 黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり。砂礫をわずかに含む。
- ④ 褐灰色土(10YR4/1) 砂礫をわずかに含む。シルト質。
- ⑤ 灰黄褐色砂礫層(10YR4/2)
- ⑥ 黒褐色土(10YR2/1) 砂礫をわずかに含む。
- ⑦ 黒褐色土(10YR2/3) 砂礫をわずかに含む。

第41図 SD4

の西側を区画する柵又は塀の可能性はある。

4 溝

SD4 (第41・42図、PL.16)

調査区東側のC5・6、D6グリッドにあり、標高69.8~69.9mのほぼ平坦面に位置する。造成土を除去した後の礫層(F層)上面で検出した。本来はさらに上層の層位から掘り込まれたものと考えられる。周囲は圃場整備による掘削がおよび、溝の東側一部分は現代の耕作に伴う溝が重複していた。

方向がN-5°-Eとほぼ南北に直線的に延びる溝で、長さ16.6m以上、幅0.84~1.13mを測り、北側調査区外へ延びる。断面は逆台形状を呈し、深さ5~10cmと浅い。

埋土は、砂礫を含む黒褐色が主体となり、一部砂礫とシルト質土が互層状に堆積する箇所も認められた。底面には砂礫層が堆積しており、ある程度の流水があったものと推定される。

遺物は、埋土中から出土した勝間田焼甕片92がある。

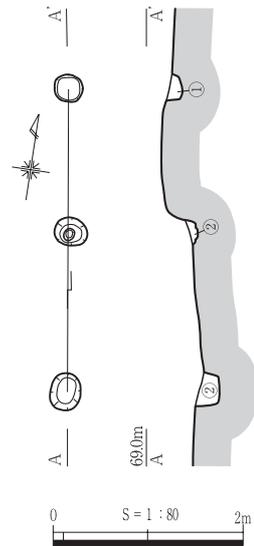
出土遺物から、SD4の時期は中世と考えられる。この時期の遺構は、当遺跡ではSD4が最も東にあることから、集落の東辺を区画する溝であった可能性がある。

5 ピット群

ピット群1 (第43図、表12、PL.15)

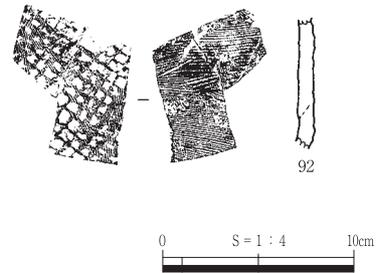
調査区のやや北西側のB10・C10グリッドにあり、標高69.4m付近の平坦面に位置する。造成土除去後の礫層(F層)上面で検出した。ピット群1中にはSB7・8がある。遺構の西側は圃場整備の際の掘削により大きく削り取られており、遺存状態は悪い。

SB7・8を構成するピットを除き、計14基のピットで構成される。配列に規則性はみられない。規模は径15~43cm、深さ5



- ① 黒色シルト(10YR1.7/1)
径1~1.5mmの砂粒を10%含む。
- ② 黒色シルト(7.5YR1.7/1)
径1~5mmの礫粒を5%含む。

第40図 SA2



第42図 SD4出土遺物

～34cmを測る。

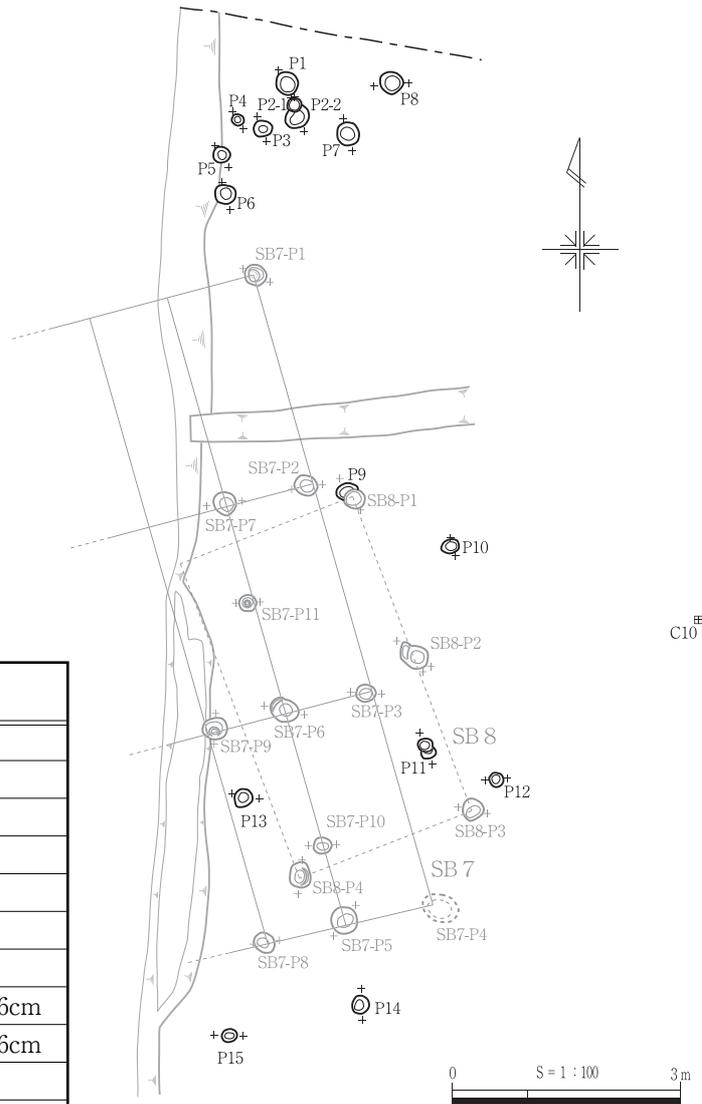
埋土は、黒褐色土が主体となる。P 7・P 8では柱痕跡が確認され、復元される柱径は、13～17cmである。

遺物は出土していない。

時期を特定する遺物が出土していないが、周辺の遺構の状況および造成土中の遺物から中世ごろのものと考えられる。配列に規則性は無いが、柱痕が認められるものがあり、SB 7・8建設に伴う足場穴などの性格が考えられる。

表12 ピット群1ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	31×28-30	
P 2-1	34×28-6	
P 2-2	18×18-10	
P 3	24×22-10	
P 4	16×15-6	
P 5	22×21-5	
P 6	43×37-11	
P 7	31×29-11	柱痕跡径16cm
P 8	30×29-26	柱痕跡径16cm
P 9	27×20-7	
P 10	29×28-5	
P 11	20×19-14	
P 12	20×20-6	
P 13	31×28-22	
P 14	24×22-12	
P 15	20×18-14	



第43図 ピット群1



文中写真3 検出作業風景

第5節 時期不明の遺構

1 概要(第44図)

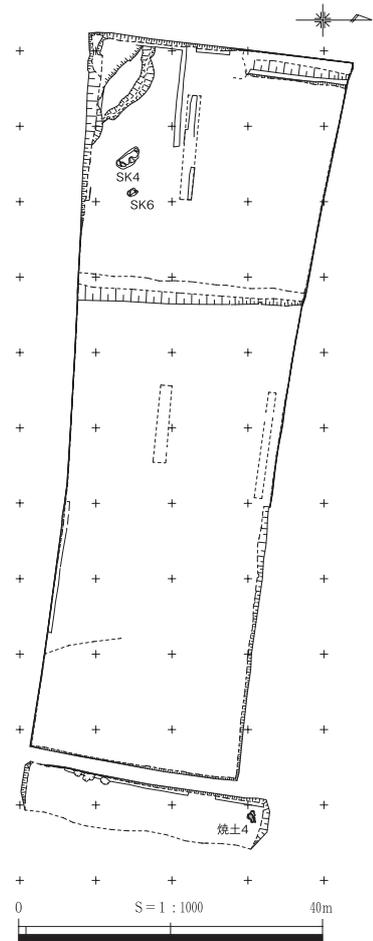
時期不明の遺構については、調査区の南西側のSK4・6、調査区北東側の焼土4がある。時期を特定する遺物等は出土していないため、時期不明とした。

2 土坑

SK4(第45・46図 PL.17・25)

調査区南西側のD12グリッドにあり、標高68.2~68.4m付近の谷に向かう緩やかな斜面部に位置する。東側約3mにはSK6、南側約3mにはSK5がある。造成土を除去し西側谷部遺物包含層除去中に、Ⅲ層(黒褐色砂質シルト)中で確認した。

平面は不整長楕円形を呈し、長軸3.6m、短軸1.75mを

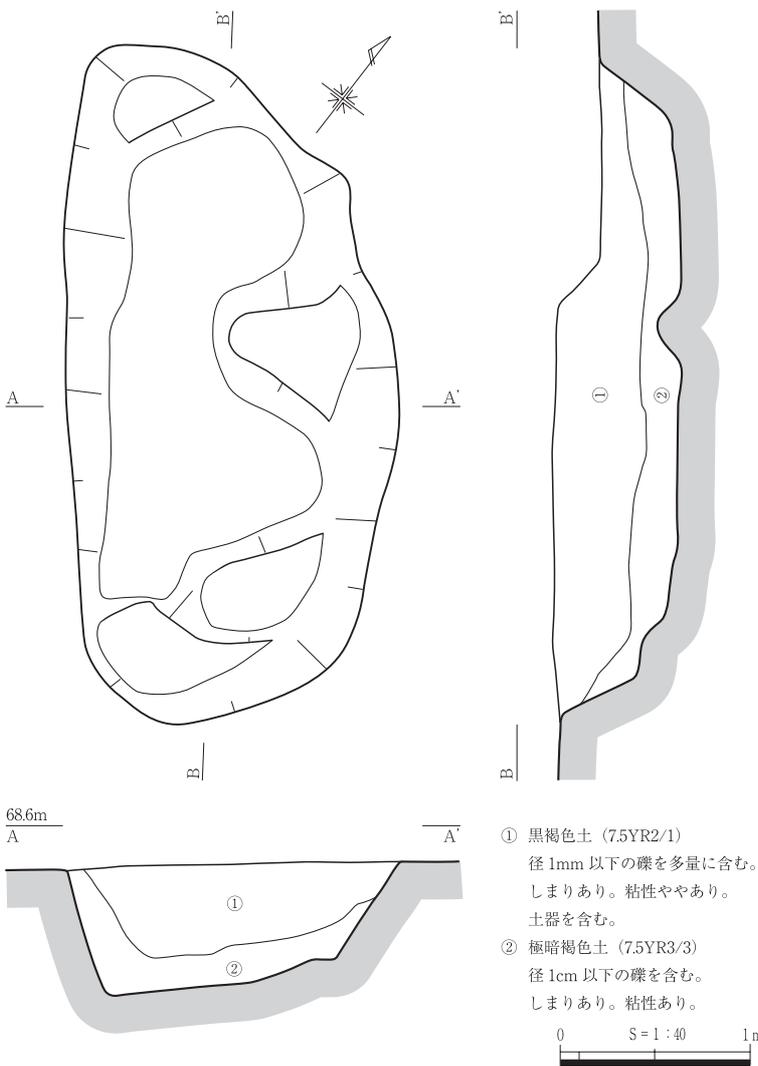


第44図 時期不明遺構配置図

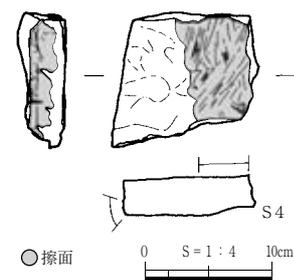
測る。断面不整逆台形状を呈し、底面は不定形で平坦ではなく、凹凸が見られる。深さ最大0.66mを測り、主軸方向はN-35°-Wである。

埋土は、2層に分層できたが、大半は1cm以下の礫を多量に含む黒色土(第1層)である。

遺物は、第1層上層から出土した



第45図 SK4



第46図 SK4出土遺物

- ① 黒褐色土 (7.5YR2/1)
径1mm以下の礫を多量に含む。
しまりあり。粘性ややあり。
土器を含む。
- ② 極暗褐色土 (7.5YR3/3)
径1cm以下の礫を含む。
しまりあり。粘性あり。

粘板岩製の砥石 S 4 がある。混入品の可能性があり、この遺構に伴うものとは考えにくい。

時期を特定する遺物が出土していないため、この遺構の時期は不明である。用途についても、確証は無く不明である。

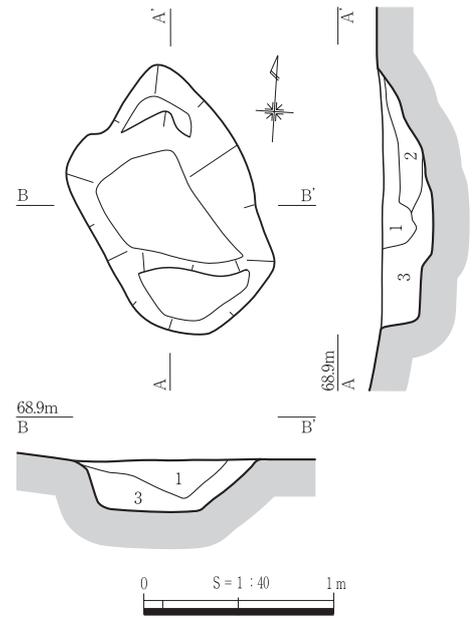
SK 6 (第47図、PL.17)

調査区西側のD12グリッドで検出した。検出面は黄褐色ローム混じりの礫層(F層)であり、圃場整備で掘削されている。SK 4の南東側に位置する。

平面は不整長方形を呈し、長径1.4m、短径0.9mを測る。断面系は逆台形を呈し、深さ0.28mを測る。主軸はN-30°-Wで、西側谷部の等高線の向きと一致する。

埋土は下層が地山と同質で、上層はクロボク由来の黒色土である。

遺物は出土しなかった。形態的特徴から遺構と判断したが、風倒木痕の可能性も考えられる。



- 1 黒色シルト (10YR1.7/1) 径5～20mmの礫が5%混じる。
- 2 黄褐色砂質シルト (10YR5/6) 地山と同質の礫混じりブロックを含む。
- 3 暗オリーブ褐色砂質シルト (2.5Y3/3) 地山と同質の礫混じりブロックを含む。

第47図 SK6

2 焼土

焼土 4 (第48図、PL.17)

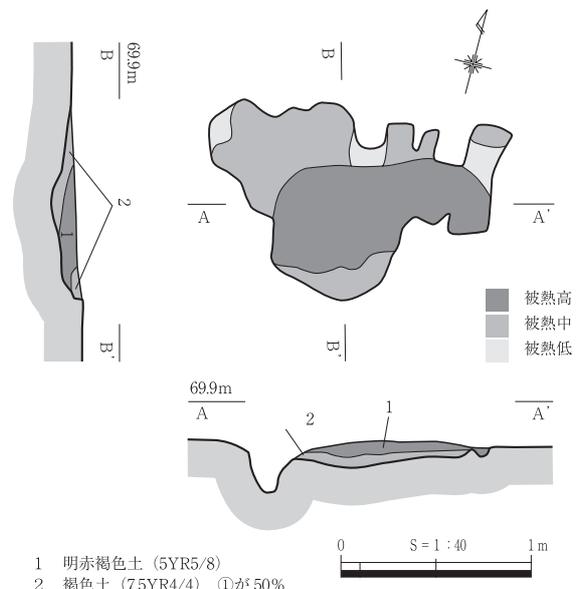
調査区東側の農道下、B3グリッドにおいて、造成土直下の黒褐色土(D層)上面で検出した。

平面は不整形で、長径1.5m、短径1.0mである。被熱を示す色調の変化が、深さ0.15mまで認められる。中心から外側へ、上面から下方へ向かって明赤褐色、褐色、黒褐色へと変化している。

遺物は出土していないため、時期は不明である。



文中写真4 現地説明会風景1



- 1 明赤褐色土 (5YR5/8)
- 2 褐色土 (7.5YR4/4) ①が50%

第48図 焼土4

第6節 包含層遺物について

1 西側谷部包含層出土遺物(第49・50図、PL.23・24・26)

調査区南西側にある西側谷部では、I・II層から多量の遺物が出土した。以下、図化したものについて述べる。

93は縄文土器片で、外面ネガティブ楕円押型文、内面粗いナデが施される。縄文時代早期のものである。

94・95は弥生土器甕片で、口縁部が逆L字状に折れ曲がり、体部上半に3条以上の沈線が施される。清水編年I-3様式、弥生時代前期後葉ごろのものと考えられる。

96～102は、弥生時代中期のものである。96・97は外反する口縁をもつ壺片で、口縁部には3条程度の凹線が施される。98～102は甕片で繰り上げ口縁をもち口縁部外面には3条程度の凹線が施される。102には頸部に指頭圧痕文帯が施される。壺97は清水編年IV-1様式、弥生時代中期後葉、壺96・甕98～102は、清水編年IV-2・3様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

103は、弥生時代後期のもので、短く直立する口縁部外面に凹線、頸部以下ケズリが施される。清水編年V-1様式、弥生時代後期前葉ごろのものと考えられる。

104～106は、弥生時代甕底部片で、シャープな平底を呈す。正確な時期は不明であるが、弥生時代中期から後期ごろのものと考えられる。

107～117は、奈良・平安時代の土師器甕である。外反する単純口縁をもつ。

118・119は、土師器竈片で、いずれも底部分の破片である。

120は、土師器皿で内外面赤色塗彩が施される。伯耆国庁第1段階、8世紀後半ごろのものと考えられる。

121～137は、奈良から平安時代の須恵器である。121は蓋で、端部が短く折れ曲がる。122～128は坏である。122～124の底部には回転糸切り痕が見られる。126～128は碗状の坏で、口縁端部が不明瞭であるが括れる。125は焼成が不良な坏である。129～135は高台坏である。136・137は高台付皿である。これらは、八峠編年奈良初から平安I初期にあたり、8世紀から9世紀にかけてのものと考えられる。

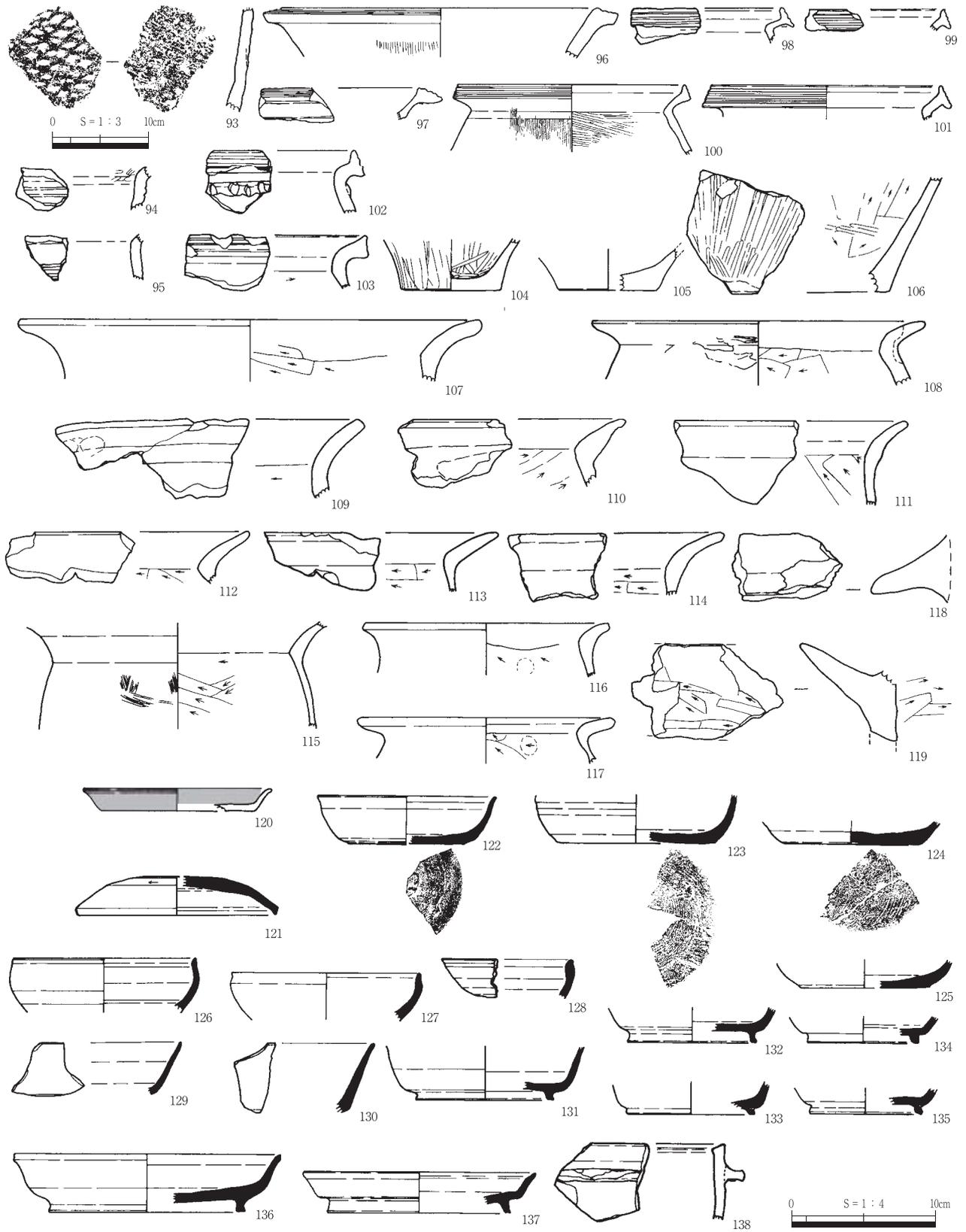
138は、瓦質土器羽釜である。15世紀ごろのものと考えられる。

139は、分銅形土製品である。表面には縁辺に貝殻腹縁による刺突文が施され、側面から裏面に向けて4個の穿孔が施される。弥生時代中期ごろのものと考えられる。

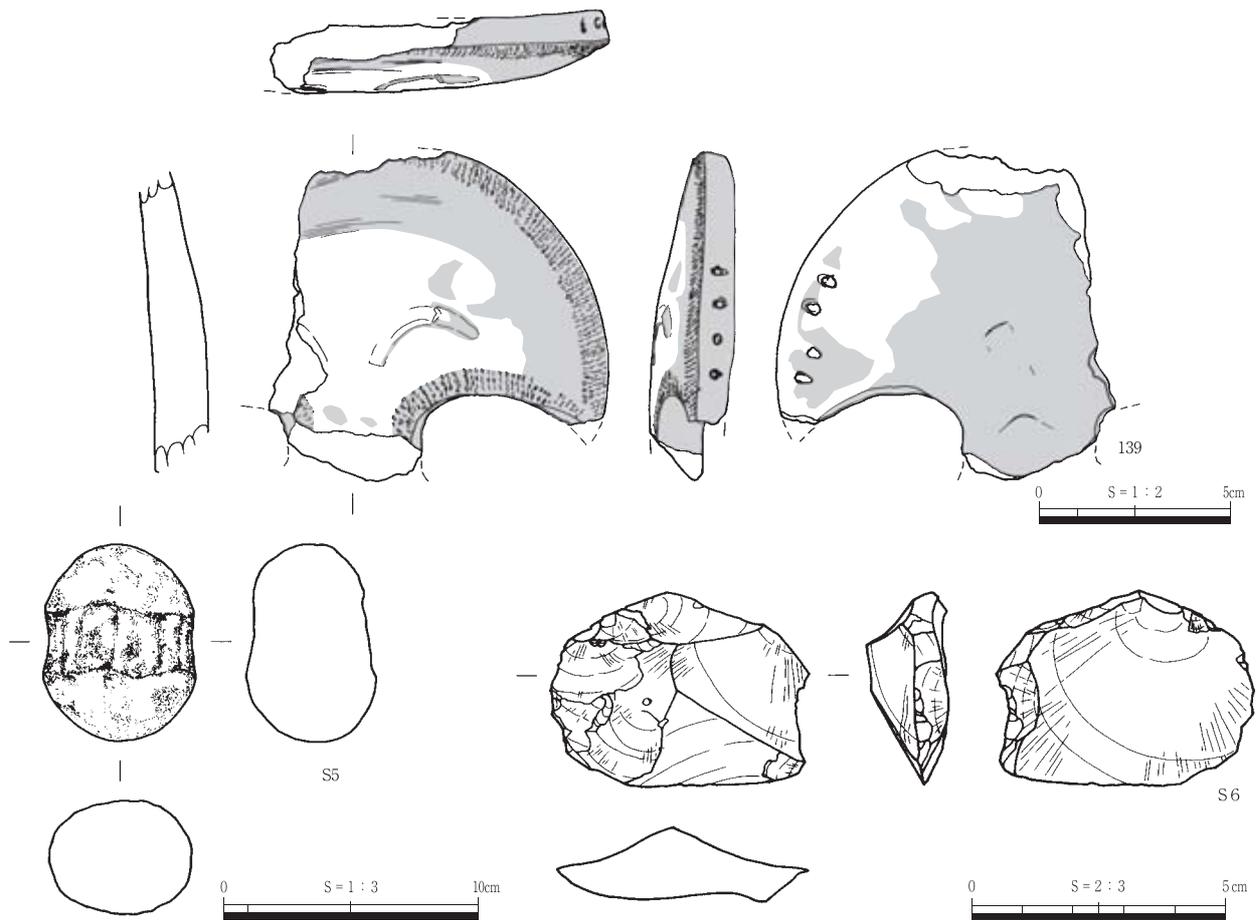
S5は、花崗斑岩製の瀬戸内型有溝石錘である。ほぼ完形である。S6は、一部剥離痕が見られる黒曜石製調整剥片である。

西側谷部の遺物包含層からは、縄文時代から中世にかけての遺物が出土しているが、大半は奈良・平安時代のもので、当遺跡が最も繁栄した時期の遺物が主体である。II層からは、94・110・111・115・118・119・122・123・135・138が出土し、その他はI層から出土しており、最も新しい遺物が、15世紀代のものであることから、この時期に埋まりきったものと考えられる。その他、図化はできなかったが製塩土器(焼塩土器)の破片を40点確認した。小片のため形態は不明であるが、八峠分類逆円錐形A類(八峠2000)に相当すると考えられる。奈良時代から平安時代ごろのものと考えられる。

また、調査区内では検出されなかった古い時期の遺物が出土していることから、調査区周辺では、さらに古い時期の遺構の存在が推定される。



第49図 西側谷部出土遺物(1)



第50図 西側谷部出土遺物(2)

2 C6・7、D6・7、E6・7グリッド包含層出土遺物(第51図 PL.24・25)

平安時代の遺構が集中して検出された、調査区やや東寄りのC6・7、D6・7、E6・7グリッドの遺物包含層(D層)から出土した遺物について述べる。

140は、弥生土器甕片である。繰り上げ口縁をもち、口縁部外面に3条の凹線が施される。清水編年IV-2・3様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

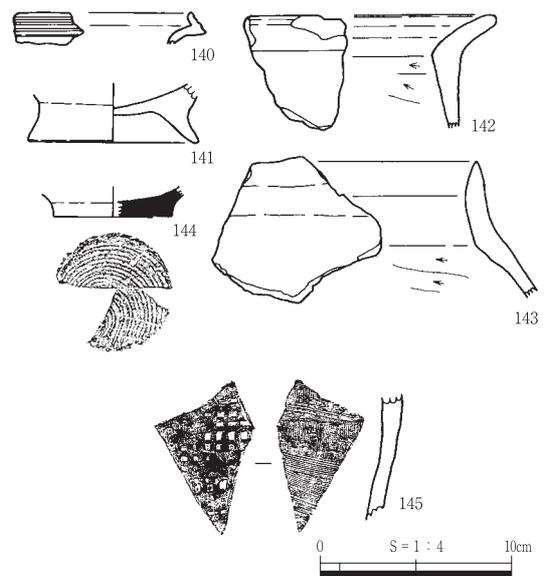
141は、土師器足高高台坏である。坏部を欠くが大型の底部をもつ。

142・143は、土師器甕片である。142は外反する単純口縁、143は直立気味の単純口縁をもつ。

144は、須恵器坏底部片で、底部回転糸切り痕をもつ。141～144は、奈良・平安時代ごろのものと考えられる。

145は、勝間田焼甕片である。外面格子目叩き、内面ハケ目が施される。中世ごろのものと考えられる。

D層からは、弥生時代から中世にかけての遺物が包含され、これらは遺構が形成された時期のものに符合するものである。



第51図 C6・7、D6・7、E6・7グリッド包含層出土遺物

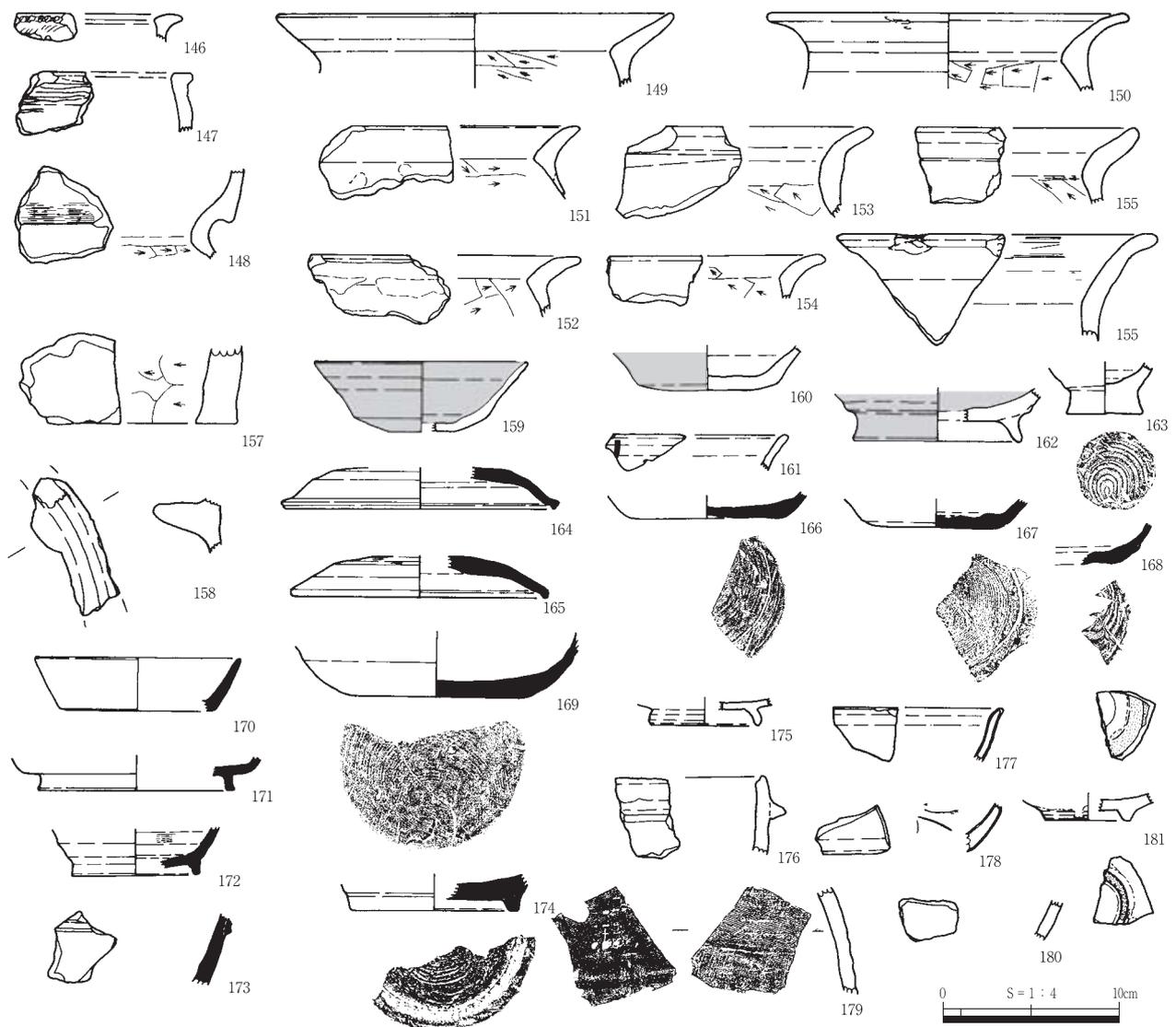
第7節 遺構外遺物について(第52図、PL.24・26)

ここでは、遺構に伴わない、主に表土から造成土に含まれた遺物について、図化したものについて述べる。

146～148は弥生土器甕片である。146は口縁部が逆L字状に折れ、端部に刻み目が施されるもの、147は体部上半に乱れた沈線が施されるものである。清水編年 I-3 様式、弥生時代前期後葉ごろのものと考えられる。148は、口縁部に多条化した平行沈線が施される。清水編年 V-3 様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。

149～163は奈良・平安時代の土師器である。149～156は土師器甕片で、外反する単純口縁をもつ。157・158は土師器竈片で、157は底部片、158は底部分の破片である。159～161は、土師器坏で内外面赤色塗彩が施される回転台土師器である。161の外面に墨書があるが、文字は不明である。162は土師器高台坏である。これらは、伯耆国庁第2段階、9世紀後半ごろのものと考えられる。163は柱状高台坏で、底部に回転糸切り痕が見られる。八峠編年中世Ⅱ期、12世紀から13世紀はじめごろのものと考えられる。

164～174は、奈良から平安時代の須恵器である。164・165は蓋で、端部が短く折れ曲がる。八峠編



第52図 遺構外出土遺物

第3章 調査の成果

年奈良中期、8世紀後半から9世紀はじめごろのものと考えられる。166～169は坏で、底部には回転糸切り痕が見られる。170・172は高台坏である。171は高台付皿である。173は坏部に突帯をもつ高台坏の体部片である。174は高台付壺底部片で、底部には回転糸切り痕が見られる。八峠編年平安Ⅱ期、9世紀末から10世紀代と考えられる。

174は、灰釉陶器高台付碗である。

176は、瓦質土器羽釜である。八峠編年中世Ⅴ期、15世紀前半から16世紀はじめごろのものと考えられる。

177・178は青磁碗で、177は口縁が外反する青磁碗D類、178には内面に線描きの形骸化した唐草文が描かれる。14世紀から15世紀ごろのものと考えられる。

179は勝間田焼甕片で、外面格子目叩き、内面ハケ目調整が施される。

180は瀬戸・美濃焼天目茶碗片で、全面鉄釉が施される。大窯期以降のもので、15世紀後半以降のものと考えられる。

181は陶器碗で、底部内面蛇の目釉剥ぎが施される。近世以降のものと考えられる。

これらは、遺構が形成される時期のものが大半であるが、調査区内では検出されなかった古い時期の遺物が出土していることから、調査区周辺では、さらに古い時期の遺構の存在が推定される。

なお、上記土器以外にも炭化米を極わずか(1粒)検出することができた。形状がわかるものは長さ4.8mm、幅2.9mmを測り、長/幅比1.66となり、ジャポニカの特徴を示すものと考えられる。



文中写真5 炭化米顕微鏡写真



文中写真6 現地説明会風景2

第4章 総括

第1節 古代の樋口西野末遺跡

1 遺構について

樋口西野末遺跡の古代の主要な遺構として、平成23年度調査区東半と平成21年度調査区の範囲で検出した掘立柱建物群が挙げられる。この掘立柱建物群は、位置と建物の方位から3群に分けることができる。真北に近い方位のSB3・SB4(A建物群)、真北に対して10~12度西偏するSB5・SB6(B建物群)、真北に近い方位のSB1(新・旧)・SB2(C建物群)である。

A建物群は廂付建物で最大規模のSB3と、ほぼ同一位置で建て替えられた廂付建物のSB4であるため、建物群を構成していたわけではない。SB3からSB4への建て替えに伴い、建物規模が縮小するものの、建物の位置と方向、平面形態を踏襲していることから、規格性のある重要な建物であったと推定できる。SB3の立地は緩斜面であり、柱掘方の底面高が傾斜に沿っているため、SB3は整地せずに立柱されたと考えられる。また、SB4の柱掘方の底面高もSB3と同様に傾斜に沿って傾斜していることから、SB4の立柱に際しても地表面は整地されなかったと考える。中心的な建物であるSB3は検出範囲では北妻側の廂を欠く三面廂建物であるが、建て替え後のSB4が北妻側に廂を伴うことから、四面廂建物である可能性が高い。また建て替え後のSB5の東面に廂がつくことと、後述する敷地の区画施設であるSA1が建物の西面側に位置することから、建物の正面は東側であったと考えられる。

ところで、四面廂建物は官衙の建物の中でも最も格式の高い建物であると考えられており、奈良時代においては内裏正殿、大極殿、国庁正殿、寺院金堂、講堂、高級官人邸宅などに限られていた(松本2003)。平城京以前の四面廂建物は、1町以上を占地する大規模な敷地に限定されていたと見られるが、平安京の場合は大規模宅地だけでなく、中規模敷地にも四面廂建物が建てられるようになり(家原2011)、地方集落では仏堂や神殿に普及するようになるとされる。

因幡・伯耆両国庁においては四面廂建物が採用されておらず、鳥取県内では伯耆国庁に程近い倉吉市・不入岡遺跡と、米子市・博労町遺跡の2遺跡でそれぞれ1棟ずつが見つかっている。

不入岡遺跡のB区で検出された四面廂建物SB73は、桁行6間(14.1m)、梁行4間(8.1m)の平面規模で、柱掘方の平面形は方形である。B区の遺構はBⅠ期(8世紀前半)とBⅡ期(8世紀後半)に分けられていて、四面廂建物SB73はBⅠ期の遺構と考えられている。BⅠ期の建物は、SB73を中心に長大な建物SB45・SB46・SB74が「コ」の字形の、典型的な官衙配置を取ることから、BⅠ期の遺構は未発見の久米郡衙あるいは現在知られる伯耆国衙への移転前の8世紀前半に営まれた前身国衙の可能性が挙げられている(竹宮1996)。

博労町遺跡は溝と柵列で囲繞された方形区画の敷地内に、掘立柱建物群が区画に沿って配置される。5区で検出された四面廂建物SB06は平安時代初頭の遺構とされ、桁行7間(7.6~8m)、梁行4間(4.5~4.8m)の平面規模で、柱掘方の平面形は円形である。遺跡からは墨書・刻書土器、銅製帯金具、石帯、漆貯蔵具、転用硯、砥石、鍛冶関連遺物が出土しており、会見郡衙の官衙関連遺跡と考えられているが、建物群がいわゆる官衙的な配置をとらないことや、柱掘方のばらつきや柱筋の通りの悪さから、別院や館などの官衙末端施設の一部との見解が示されている(濱野2011)。

B建物群は廂無しの側柱建物が東西に並ぶ。建物の平面規模は、SB4の身舎とほぼ同一である。